

た。  
琉球では、大正、昭和期と極端な共通語教育がなされ、

# 卷一・二から卷三への物語継続の方法

卒論 狭衣物語の構成と方法  
——作者の創作過程を辿って——

三十回生 平井千恵

## 第三章 卷四

### 第一節 源氏宮喚起の展開

#### 第二節 狭衣即位の構想

卒論「狭衣物語の構成と方法」では、△作者の創作過程に作品の構成を探る▽という平野孝子氏の構成論の観点から物語をながめ、同氏の三部構成（第一部―卷一・二、第二部―卷三、第三部―卷四）の形式を借りて論を進め、私なりの作品構成論、作品方法論を述べてきた。

## 卒論目次

序

本論

### 第一章 卷一・二

#### 第一節 狭衣と源氏宮の関係設定

#### 第二節 源氏宮中心の展開

#### 第三節 卷一・二の構想と物語継続の方法(1)

### 第二章 卷三

#### 第一節 物語継続の方法(2)

#### 第二節 女二宮中心の展開

#### 第三節 物語の屈折と物語継続

ここでは「卷一・二から卷三への物語継続の方法」と題して、卒論の第一章三節と第二章一節を取り上げて紹介したい。この論は、試論あるいは私論ともいうべきもので、論としては甚だ根拠の薄いものにちがいない。であるからして、この論が宙に浮いたような論にならないためにも、論の背景あるいは位置付けというものをまず確かめておく必要がある。そこで、本論に入る前に、本論文の背景として卒論要旨を簡単に述べておく。

狭衣物語は四巻からなる長篇物であるにもかかわらず、殆ど無駄な場面や不要の人物がなく、「構成の整然とした作品」<sup>注1</sup>となっている。そこで卒論では、その狭衣物語がいかなる構成でできあがっているのかという作品構成と、狭

衣物語が「構成の整然とした作品」と言われ、又そう成り得たのは作者のいかなる方法によるのかという作品方法の二点について調べた。平野孝子氏の構成論の観点から、作者の創作過程を辿るという方法によって試みた。その結論を述べたい。まず作品構成は、物語展開の中心となる女性に着目し、巻一・二を源氏宮中心の展開、巻三を女二宮中心の展開、巻四を源氏宮喚起の展開とした。作者は冒頭で狭衣の源氏宮への禁じられた恋を強調し、物語の方向を指し示した。そして、その禁じられた恋という主流から派生した悲劇の物語に飛鳥井女君物語と女二宮物語があった。巻一巻二と源氏宮への禁じられた恋がひた押しに押されており、ここまで作者は当初予定されたとおりのコースを辿って書き上げていると思われる。作者は、更に物語を継続するにあたり、源氏宮の起用は難しいため脇役であった女二宮に焦点を当てて物語を進めた。そのため巻三になると源氏宮は一時忘れられ、女二宮物語は冒頭で示された方向から逸脱してしまい、物語全体の流れに屈折を生じさせてしまう。作者は当初目指した方向に物語を戻すために、巻四では宰相中将妹君を登場させ、源氏宮への恋を狭衣によみがえらせた。物語は途中屈折を生じるが、全体から眺めると、それは源氏宮への禁じられた恋というテーマで包括されており、それ程破綻もきたしておらず、長篇物としては構成の整然とした作品となっている。では、この作品がそう成り得たのはなぜかという作品方法について、まず作者の緻密

して源氏宮の「永遠の女性」としての位置が保持されてきたことからわかるように、執筆の間中、作者が齋院讚美の姿勢を崩さなかったからである。又それが構想を立てる時の規制力となっていたと思われる。構想を立てる時まず作者は齋藤讚美の効果を第一に考慮し、それによって他の構想が立てられていくという具合だったようだ。これが作者の特徴であり、作品方法と言える。作者は六条齋院祿子内親王宣旨とほぼ確定している。作者に関しては詳しく触れずに論を進めたが、ここで述べた作者の特徴からしても、作者が齋院に仕えた者であったことは間違いないであろう。

以上が、だいたいの卒論要旨である。今ここにちょっと述べたことではあるが、私は、計画的で完璧な展開をみせる巻一・二までを作者の初期構想だと考えている。その考えから出発して、本稿は作者が当初予定の構想を書き終えてしまいつつあった時、あるいは書き終えてしまった時、いかような方法で新たに物語を進めようとしたかを推論するものである。それを「巻一・二から巻三への物語継続の方法」と題して抜き出し、一つの論としてここにあげる。

なぜ巻一・二を第一部とし、また作者の初期構想と考えるのか。それは、平野氏の言う「ある女性の生き方注2」のものに、他の女性の存在が影響しているかいないか注2という点に着目し筋の展開を辿っていくと、冒頭から高野詣（巻一・二）までの物語は、筋の上で互いに交錯を見ない三物語（源氏宮物語、飛鳥井女君物語、女二宮物語）に分かれ

得たのはなぜかという作品方法について、まず作者の緻密な構想立てがあげられる。だがもつと大きな理由は、物語を通

ことが見い出せるからである。狭衣は、義妹であり、春宮の妃がねでもある源氏宮との恋を「あるまじき事」と深く知っていながらも、物心つく頃より、

「かからん人をこそ、わが物にせめ、これに劣りたらん人を見じ」(P 31)

「此御様ならん人をば見ばや。さらんこそ生ける甲斐なかるべけれ」(P 36)

と深く思い込んでおり、狭衣の心は、源氏宮一辺倒の恋愛観に強く支配されており、それは避け得ることのできないものであった。

いろ／＼に重ねては着し人知れず思ひそめてし夜半の狭衣 (P 52)

「一夫一婦制への願い」<sup>注3</sup>が込められたこの歌は、つまりは源氏宮一人とだけの結婚を願うものであり、源氏宮への貞心の誓い、初恋である源氏宮への純愛の誓いでもあった。しかし、このような誓いとは裏腹に、「官能的刺激に全く

盲目で、肉体が理性に先走る」<sup>注4</sup>という性格から、狭衣は飛鳥井女君、女二宮と次々に關係を持つていく。そして二人に心惹かれていくのだが、源氏宮中心の思考と源氏宮への貞心、純愛の誓いとに囚われた狭衣の行動は誠心誠意を尽くさないものとなる。

「局などしてや、あらせまし」と、「人知れず思ふあたりの、聞き給はんに、戯れにも、『心とゞむる人あり』とは、聞かれたてまつらじ」と、おぼす心深ければ、

… (P 90)

語（源氏宮物語、飛鳥井女君物語、女二宮物語）に分かれながらも源氏宮中心に統一された展開となっているという

右の引用文より、狭衣が女君に素性を明かさないので、又女君を邸に引き取らないのも、女君との恋愛が源氏宮に知られるのを恐れたためであったことがわかる。女君の失踪事件も、もとはと言えば、狭衣のそういった曖昧な姿勢から引き起こされたと言える。

今はとて、ゆくりなく定まり居ん事の、いみじう口惜しう (P 141)

世のけしき見侍る程は、しのび／＼にも見たてまつらん (P 163)

狭衣が女二宮との仲を公にしないのも、引用文からわかるように源氏宮を諦めねばならない入内の日までは身を固めず、最後のぎりぎりまで源氏宮への貞心、純愛の誓いを全うしたかったからである。そのため狭衣は女二宮に対して無責任・薄情とも言える態度をとり、女二宮は出家してしまふ。飛鳥井女君、女二宮二人までが、狭衣の手の届かないところへ行くが、最後に残った源氏宮も入内の時が訪れたかと思うと、加茂の神託によって齋院に決まる。源氏宮の齋院御渡の日、狭衣は最後の求愛をするが、宮は冷淡に拒絶する。三人から恋愛の望みを断られた狭衣は、女二宮腹若宮を絆としながらも、源氏宮の齋院入りを切っ掛けとして出家を決意し、高野詣の運びとなる。狭衣と源氏宮の恋は「禁じられた恋」であったが、狭衣はその恋に一縷の望みを託して、あの「いろいろに重ねては着し」の歌に込められた源氏宮への貞心、純愛の誓いを空しい操立てによって全うしようと努める。それは狭衣の源氏宮への愛の証

しでもあった。そのために二人の女性は悲劇の一端を辿る。その二人の女性の悲劇を語ることは、結局狭衣の源氏宮への愛の熱さを語っていることになる、そこに第一の女主人公としての源氏宮と脇役としての飛鳥井女君、女二宮の役割を見い出せる。女君も女二宮も、冒頭から高野詣まで流れている源氏宮との「禁じられた恋」の物語の流れから外れることなく、その流れの中で各々の悲劇を演じている。よって、巻一・二は源氏宮中心の展開と言える。

平野氏は、作者の初期構想は巻一・二あたりまでとしており、「作者の女主人公である齋院をモデルにしたすばらしい源氏宮に、すぐれた男性を配し、しかも出家させるほどの失恋の痛手を負わせるのが、はじめの構想だった」と<sup>注5</sup>と考えておられる。作者が齋院宣旨だとすると、物語執筆の動機は主人の齋院を称えることであつたに違いない。その女主人公は、神の世界の人、永遠の女性として永遠に清らかなまま高め上げられねばならない。作者は物語の構想にあたり、まずそのことを根本方針に据えて登場人物の設定をしたのだらう。それにより源氏宮の処女防備となる狭衣との複雑な関係が設定されたと思われる。源氏宮は、美しい外面描写のみで、その心理は不明瞭であるが、これは源氏宮が一般女性の如く恋愛の苦悩に身を置くことを避けるための方法であつたと考える。源氏宮にひきかえ狭衣は、絶えず煩悶の中に世を過ぐす。源氏宮は度々美しい姿を現わすだけで、何事も思ひまかせぬことのないはずの狭衣を

苦悩と二人の女性の悲劇が大きければ大きい程、それは間接的に源氏宮を高め上げていくことになり、源氏宮の「永遠の女性」としての位置を築き上げるのに効果的に働いている。私は、それが作者の初期構想の狙いであつたと考えている。

平野氏は「源氏の宮への求愛ではじまった狭衣の悲恋物語は、……源氏の宮が神の世界の人となつた時をもつて一応の完結を予想したのではないか」と<sup>注6</sup>とする。先に述べたとおり、巻一・二は源氏宮物語で統一された物語の流れであることから、又巻二と巻三間の物語の流れの屈折からも、氏の説に同意し、更に私は、作者がどのような方法で新たに物語を続けようとしたかの推論を試みた。前置き、説明が長くなったが、ここから本題に入るわけであり、それを述べていく。

作者は、狭衣に出家の決意をさせることによって、冒頭から貫かれていた源氏宮への恋に一応の終止符を打たせる。それは同時に、初期構想の完結点であり、作者の心の切り換え点でもあつた。作者は新たに物語を続けるために、狭衣の出家を父大殿に阻止させて、狭衣を塵俗の世に引き留める。そして、高野詣で狭衣に飛鳥井女君の兄に引き合わせ、女君の生存を知らせる。ここは重要な箇所であり、ここでの話によって物語は巻三へ継続される。巻一末で女房は入水間際兄に救出されるが、その部分は、作者が物語継続を決意し、先の巻二末の高野詣の話を書くにあたり、後

わすだけで、何事も思ひまかせぬことのないはずの狭衣を  
救出は作者の初期構想にはなかったと考えるからである。

入水に至る迄をあれ程の文章の高潮ぶりで描いておきながら、それまで話にすら出てこなかった生き別れになった兄なる人物によって女君を救出するというのは、あまりに取って付けたような展開である。巻二末の高野詣まで、狭衣は女君は入水して死んだと思つているので、女君救出の巻一末の部分がなくても、冒頭から巻二の狭衣の出家の決意までの物語の辻褄は合う。巻一の最後の文は、

「この程こかしこに参り歩くべき所々侍り」とて、出でぬ。(P 116)

であり、巻二末の高野詣での狭衣と女君の兄の出会いを可能にするようにできていることは、巻一末の女君救出以降の部分は後で付け加えられたと考える根拠となろう。女君を生存させたことについては後に述べる。

平野氏は、作者の物語継続の方法を次のように述べる。

「どういふ事情でか、おそらくは評判がよくて書きつがれることが要請されたと考えられるが、ともかくその後を続けることとなった。……その際源氏の宮に関しては結局のところこの女性を描こうとした作者のモチーフはすでにみつ出してゐるため、齋院となつた現在、……物語の中にくみ入れ、起用することがおいそれとできなかつたことを意味すると思ふのである。これに対し、他の女性は狭衣の子をのこしているという事実があり、この子供たちへの狭衣の愛情に物語継続の緒口がみつけれられ、メインプロットとなるべき源氏の宮は、ために一時忘れられるという結果が

は、その部分は、作者が物語継続を決意し、先の巻二末の高野詣の話を書くにあたり、後

おこつたと思うのである。」源氏宮に関しては氏と同意見である。源氏宮が齋院となつては、狭衣を源氏宮に容易に近づけることはできないし、宣旨である作者は齋院を神聖視するので、狭衣に力尽くで源氏宮を奪わせて二人の関係を進展させるといふことはしないはずである。又それは齋院讚美という本来の目的に反することでもある。では源氏宮中心に悲劇を展開し狭衣の煩悶を深めるといふ巻一・二の線を狙うのはどうか。巻一・二で源氏宮はその身の置き所が定まっていなかつたからこそ狭衣の処世方針を決定する第一要因となり、ひいては物語展開の要ともなれたが、その身が結婚の可能性がない齋院となつては狭衣の処世方針を決定する要因としては弱いので、巻一・二以上の効果も望めないし新味もない。そういう理由で源氏宮物語は巻三では物語の主流から外されたのだと考える。次に子供の起用に関しては氏と少し異なる意見を持つ。先に述べた如く、女君救出は初期構想になかつたとし、私は女君は悲劇的運命に飾られ入水によって美しく死んでしまふというのが作者の当初の構想であつたと考えている。作者が最初から女君の子供の登場を予定して、女君妊娠としたとは考えていない。作者は、三女性の均衡、バランスといったものに非常に気を配っている。登場のし方やその度合がそうであるが、人物設定にもそういった配慮がなされている。女君妊娠もその一つであつた。女君と女二宮は、源氏宮を中心にして、片や身分の低い陰の小草、片や皇女という身分の高い女性という対照的設定がなされたが、脇役二人に共

通の設定をすることで、源氏宮を中心に据えた脇役二人という体勢を形づくり、その均衡をはかった。妊娠という事態もそれであった。飛鳥井女君物語で作者が描こうとしたポイントとは失踪入水事件であり、女二宮物語で描こうとしたポイントは密通妊娠事件である。作者は、失踪入水事件を通して女君という女性を、密通妊娠事件を通して女二宮という女性を描こうとした。妊娠するという事態は、女二宮を描くにあたって重要なモチーフであっただろうが、女君を描くにあたっては、さほど重要な設定でなかったと考えられる。しかし、脇役同志のバランスを考え、作者は、妊娠するという設定を脇役共通のものとしたのだろう。脇役二人の妊娠は、源氏宮の清らかな身体というものを強調するのに、又脇役二人の悲劇性を強調するのに大いに効果的である。当初の構想どおり女君が入水で死んだならば、女君は入水の時妊娠状態なので、子供は登場をみずに物語から葬り去らねばならないはずである。作者が女君を救出した理由は、まさにその子供を物語に登場させんがためであったと考える。物語は人気があったためか、後日談が要請されたためか、作者は物語を続行する。物語続行にあたり作者は、三物語の体勢を崩さずに進めていこうと構えたのである。三人の中でも女君は最も人気を博した女性であり、女君物語を続けることは読者の強い要望でもあったのだろう。しかし、女君も源氏宮同様、作者の描こうとしたモチーフは既に描かれてしまっている。狭衣の愛に命を賭けたからこそ精神面における美しさを永遠に留めることができ

た女君であるが、その女君を救出し再び狭衣に対面させることは、世にありと聞くも、今はその人をとかく思尋ねんも、いとねちけがましきを、ひたすらに亡くなりなはんは、中く心安く目やすきに (P 241)

とあるように、却って女君像を褪せさせるばかりでマイナス効果であることが予想できる。そこで作者は女君を登場させずに女君物語を続行させる方法を考え出したのである。それは女君に子供を生ませ、女君を狭衣に会わせずに素早く葬り、女君を忍ぶ子供を女君物語の延長として続けることであった。巻一末の兄による女君の救出、巻二末の狭衣と女君兄の対面の箇所は物語継続の準備であったと考える。その箇所は、巻一卷二と当初の構想どおりに書き上げた後に書き加えられたという考えは前に述べたとおりである。では入水救出後の女君の事情を巻一末、巻二末、巻三に辿ってみる。

巻一末 「：尼になし給へ」と、：尼もうち泣きて、「：御身も軽らかになりてこそ、その後、何ともせめて過した、め」など言ふに、：(省略)：「この程、ここかしこ参り歩くべき所々侍り」とて、出でぬ。(P 116)

巻二末 「：海には入らずなりにけるなめり」と、聞き給に、：「あり所は知り給たらんな。幼き人や具したりし」と、せめてゆかしく思されて、：(省略)：「行方聞かせ給如く、確かに子供達が物語継続の糸口となつてはいるが、

17は既に描かれてしまっている。狭衣の愛に命を賭けたからこそ精神面における美しさを永遠に留めることができ「へ」と、数珠をしすり給ふ。験もいかゞ。(P212)

### 卷三

妹の月ごろわづらひ侍けるが、限りになりたるよし、告げに遣はしたりければ、まかり出にける。その行き所などは、「知りたると申人候はぬ」と申に、口惜し……(P218)

人たびく遣はせば、「無し」とのみ、……「妹、さは亡くなりけるにこそ」と思す。……「いかなるにても、この忍草のありなしをだに聞くわざもがな」と、御心に離る折もなし。(P220)

卷一末では、女君が出産後出家するだろうことが仄めかされて終る。卷二末の高野詣で初めて狭衣は、女君の生存と出家を法師である女君の兄の口から知る。狭衣と兄が再び会う約束をしたところで卷二は終る。卷三冒頭の高野詣で、狭衣は約束した兄には会えず、女君の危篤を知る。そして都で、女君の死去を知り、女君のために法要を営み、忍草の子供を捜す意を語る。見てきたとおり、女君は兄の救出によって生存させられても、それ以降の情況は兄を通じて間接的に伝えられるだけで、一度も登場せず狭衣にも会わず簡単に物語から葬られている。傍線部からわかるように、子供を残したことを除いては物語の展開への影響力が全く無く、入水して死んだのと変らない。これは先に述べた考へ―作者の初期構想に女君救出はなかった。女君救出は、その子供を登場させて女君物語を続行させるためであった。―を裏付けているのではないだろうか。平野氏の言われる

「あり所は知り給たらんな。幼き人や具したりし」と、せめてゆかしく思されて、……(省略)……「行方聞かせ給

如く、確かに子供達が物語継続の糸口となっはいるが、飛鳥井女君の子供に關しては作者が意図的に作り出した糸口であったと考える。女君の妊娠は重要な設定ではなかったが、作者はそれを新たな展開のきっかけとした。女君の妊娠は緻密な構想による設定というよりもむしろ付けたしの設定であったため、新たに物語を展開していく余地があったわけである。しかし、子供の登場によって、すなわち予定外の構想によって、物語は初期構想で狙った方向から外れてしまうのである。卷三では一品宮が新たに登場し、女二宮中心に物語が展開するが、そこに女君の子供の存在が大きく働いている。卷三における物語屈折の始まりは、女君の子供の登場からであった。その子供の登場は、物語継続の糸口ではあったが、物語屈折の原因でもあったわけである。

以上が、作者の創作過程を推論しての、卷一・二から卷三への物語継続の方法である。

文中の引用本文は

三谷榮一 校注 日本古典文学大系79『狭衣物語』(岩波  
関根慶子 書店昭40・8)による。

注

注1. 森下純昭 狭衣物語と山吹 岐阜大学教養部研究

報告 昭52・7

- |      |       |         |         |         |
|------|-------|---------|---------|---------|
|      | 注 2.  | 5.      | 6.      | 7       |
|      |       | 平野孝子    | 狭衣物語の構成 | 言語と文芸   |
|      | 注 3.  | 石川 徹    | 狭衣物語の定位 | 国語と国文学  |
|      |       |         |         | 昭 42・11 |
| 注 4. | 千原美沙子 | 源氏宮論その一 | 源氏宮像の形成 | 昭 34・4  |
|      |       |         | 古典と現代   | 昭 42・4  |